

$$\int_a^b \rho(t) \|\vec{c}''(t)\|^2 dt = 0$$

をえる. したがって, ρ の任意性から $\vec{c}''(t) = \mathbf{0}$ ($t \in [a, b]$), つまり, c が測地線であることが示され, (ii) が導かれる.

後半部を示そう. c が定速であるとする. この場合, (ii) が成り立つならば, (iii), (iv), (v) が成り立つことは, 定理 1.6.1, 1.6.2 における変分公式から直接導かれる. 逆は, c が定速であることから, 上述の C^r 級関数 ρ を用いた C^r 変形 δ が c の両端固定の C^r 変形であると同時に C^r 法変形でもあることに注意して, 上述と同様の議論を行うことにより示される. \square

\mathcal{L}, \mathcal{E} に対し, 次の第 2 変分公式 (the second variational formula) とよばれる公式が成り立つ.

定理 1.6.4 (\mathcal{L}, \mathcal{E} の第 2 変分公式) c を測地線とし, δ を c の両端固定の C^r 変形, ~~または C^r 法変形~~ とする. このとき, 次の積分公式が成り立つ:

$$\frac{d^2}{du^2} \Big|_{u=0} \mathcal{L}(c_u) = -\frac{1}{l} \int_a^b \mathbf{V}''(t) \cdot \mathbf{V}(t) dt,$$

$$\frac{d^2}{du^2} \Big|_{u=0} \mathcal{E}(c_u) = -2 \int_a^b \mathbf{V}''(t) \cdot \mathbf{V}(t) dt.$$

証明 $l := \|\vec{c}'(t)\|$ とおく. δ は両端固定の C^r 変形, ~~または C^r 法変形~~ なので, 定理 1.6.1 の証明によれば,

$$\frac{d}{du} \mathcal{L}(c_u) = \frac{1}{l} \int_a^b \left(\frac{\partial \delta}{\partial u} \cdot \frac{\partial \delta}{\partial t} \right) dt$$

$$\frac{d}{du} \mathcal{L}(c_u) = \frac{1}{l} \int_a^b \left(\frac{\partial \delta}{\partial u} \right)_{(t,u)} \cdot \left(\frac{\partial^2 \delta}{\partial t^2} \right)_{(t,u)} dt$$

が成り立つ. これに基点付き微分作用素 $\frac{d}{du} \Big|_{u=0}$ を作用させて, c が測地線であることに注意すると, ~~δ が両端固定の C^r 法変形~~

$$\frac{d^2}{du^2} \Big|_{u=0} \mathcal{L}(c_u) = -\frac{1}{l^3} \int_a^b (V'(t) \cdot \vec{c}'(t))^2 dt + \frac{1}{l} \left[\frac{\partial^2 \delta}{\partial u^2} \Big|_{u=0} \cdot \vec{c}'(t) \right]_a^b + \frac{1}{l} \int_a^b \|V'(t)\|^2 dt$$

$$= \frac{1}{l} \int_a^b \|V'(t)\|^2 dt$$

$$= \frac{1}{l} \int_a^b \left(\frac{\partial}{\partial t} (V(t) \cdot V(t)) - V'(t) \cdot V(t) \right) dt$$

$$= -\frac{1}{l} \int_a^b V'(t) \cdot V(t) dt$$